様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３４４１９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2016
課題番号：２４７２０１４１

研究課題名（和文）ヴィクトリア朝文学にみる医療表象と物語の文化・歴史的考察

研究課題名（英文）Medical Discourse and Narrative in the Victorian Literature from Historical and Cultural Perspectives

研究代表者
西垣　佐理（NISHIGAKI, Sari）

近畿大学・農学部・講師

研究者番号：００５８１０４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はヴィクトリア朝文学の物語展開における医療表象、特に看護行為の表象について、歴史的・文化的観点から分析を試みたものである。チャールズ・ディケンズやエリザベス・ギャスケルといった著名なヴィクトリア朝時代の作家の作品に登場する看護の場面が、物語展開において重要な転換点となっていることを考察した。さらに、オリーヴ・シュライナーやヴァージニア・ウルフといった、19世紀後半から20世紀初頭の女性作家の作品に描かれた看護行為についても、ヴィクトリア朝文学に見られる看護行為と同様の意義が見られることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research aims to explore the Victorian medical discourse, especially nursing activities, in the plot developments of the Victorian literature from historical and cultural perspectives. The focus is mainly on the notable Victorian writers like Charles Dickens and Elizabeth Gaskell, whose novels deal with the nursing scenes as the main turning point of their plots. Nursing scenes also have a strong influence on the characterization of the protagonists of their novels. Moreover, this study attempts to clarify the influence of Victorian gender ideology on the late Victorian and early 20th century novelists like Olive Schreiner and Virginia Woolf, who treat Victorian nursing discourse as one of the important scenes in their works.

研究分野：19世紀イギリス文学

キーワード：ヴィクトリア朝文学　医療表象　看護　ジェンダー　物語展開

１．研究開始当初の背景

19 世紀イギリス・ヴィクトリア朝時代において、「女性と職業」というテーマは、当時主流であった男女の性的役割分業イデオロギーにおいて、特に中流階級の女性にとっては切実な問題であった。そして、19 世紀イギリス文学においても、中流階級女性の職業として、家庭教師（ガヴァネス）と看護師（ナース）が良く取り上げられた。だが、ガヴァネスと文学に関する研究は盛んに進められているものの、看護行為と文学に関する研究は、国内的にもかつ世界的に見てもまだまだ少ない状況であった。

研究開始当初、Catherine Judd, *Bedside Seductions: Nursing and the Victorian Imagination, 1830-1880* (1998) が数少ない研究例の一つであった。Judd の中心的な主張は、ヴィクトリア朝文学の中でも、特に女性作家の作品に見られるヒロインあるいは女性登場人物の行う看護行為が、セクシュアリティと密接に結びついていること、また看護を行う主体が物語の中心的存在、ひいては時代のヒロインにもなり得るということである。特に、歴史的に看護師が時代のヒロインになった例として、クリミア戦争時に活躍し、後に看護学校を設立したことで看護師という新たな専門職への道を作った Florence Nightingale (1820-1910) や Mary Seacole (1805-81) といった女性専門看護師たちを取り上げ、彼女たちの尽力により看護師の職業的地位が飛躍的に向上した、と主張する。ただし、彼女の主張には男性作家の作品における病・医療・看護の言説および男性登場人物と医療・看護の関連について触れられていないので、議論が十分に尽くされたとは言えなかった。

さらに、文学と病や医療行為に関する研究自体も数が少ない状況であった。 Miriam Bailin, *The Sickroom in the Victorian Fiction (1994)* や Janis McLarren Caldwell, *Literature and Medicine in Nineteenth-Century Britain: From Mary Shelley to George Eliot* (2004) が主要な批評としてあげられるものの、その後大きく飛躍した研究は見られていなかった。

私は、これまでの研究論文や博士論文でヴィクトリア朝時代の作家、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1802-1870）の作品における看護の物語内表象と当時の医療・看護師事情について研究を重ねてきた。その中で、当初の関心はヴィクトリア朝時代における中流階級女性の理想像と職業の関係について考察することにあった。その際、ガヴァネスと女性との関連は数多くの研究がなされているものの、看護師と女性性との関連は、文学における病や医療行為の場面の多さに比べて極めて少ない事が判明した。

さらに、看護は女性的行為という前提で研究を続けているうちに、特にディケンズの作品では、ヒロインや女性登場人物のみならず、男性登場人物も女性同様の看護を行い、それが物語展開にとって極めて重要な役割を果たしていることにも気がついた。それゆえ、ディケンズ文学においてなぜ男性も看護を行うのか、そして女性と男性の看護にはどのような違いがあるのかを考察するうちに、看護主体の性別の相違と物語展開との関連を分析する事が必要であると判断した。

また、専門職である看護師と、家庭内義務として行うアマチュア看護人の相違も物語展開や人物造型に多大な影響を及ぼしている。特にディケンズの中期作品、*Martin Chuzzlewit* (1843-44)では、専門職の看護師で悪名高きギャンプ夫人が登場しているのだが、実は男性登場人物たちも作中で看護行為を行っていることから、上記にあげた論点を「男が癒し手になるとき―『マーティン・チャズルウィット』にみる看護の諸相」という論考にまとめて発表した。そうした読みをディケンズ作品のみならず他の同時代の文学作品、特に女性作家の作品分析に応用し、看護と文学の関係や人物造型・物語展開への影響について男性作家の手法との比較分析を試みてきた。

それゆえ本研究では、こうした数少ない研究でまだ議論されていない部分を、特に医療・看護に関する男性作家と女性作家の関心の相違や、登場人物の性別と看護行為および物語展開に関する影響などを中心に歴史・文化的背景から考察し、ヴィクトリア朝文学における医療・看護の言説を体系的に整理した上での新たな読みを提示することを重要な課題とした。

２．研究の目的

本研究の目的は、19 世紀英国ヴィクトリア朝文学、特にディケンズやエリザベス・ギャスケル(Elizabeth Gaskell, 1810-65)を中心とした作品中に見られる医療行為、その中でも特に看護行為に関する表象と物語展開や登場人物造型との関連性を文化的および歴史的観点から考察し、ジェンダーも含めた複合的視点からテクストの新しい解釈を試みることである。特に以下の二点について主要な研究目的とした。

(1) ディケンズ作品の分析を中心としつつ、他のヴィクトリア朝作家、特に期間内ではギャスケルを中心とし、男性による看護という点では、ヴィクトリア朝後期の南アフリカ出身の女性作家オリーヴ・シュライナー(Olive Schreiner 1855-1920) といった作家の作品を中心に比較検討する。その上で、各作品における医療・看護という主題の扱いの相違およびディケンズ作品で見られた特徴と他作家の作品における位置づけの違いを考察する。

(2) ヴィクトリア朝イギリスにおける医療・看護の位置づけおよびその意義を、特にナイティンゲールやシーコールといった当時の著名な看護師たちやナイティンゲールの著作、他にも当時の医学・社会・文化的文献を幅広く調査することで、明らかにする。それによって医療と文学およびジェンダーの関連がヴィクトリア朝文学作品に成立した背景を

解明する。
　上記の二点を中心に、64 年間続いたヴィクトリア朝イギリスにおける医学・看護の言説を文学研究と絡めて考察することは、19 世紀イギリス小説の複合的で多様な本質の一端を解明する手がかりとなるだろう。

３．研究の方法
　本研究は研究代表者が単独で行い、作品・文献資料および歴史的資料の収集や分析や整理を行った後に論文を発表あるいは研究発表を行った。

平成 24 年度
　エリザベス・ギャスケルの作品におけるウィリアム･ワーズワースの影響を調べるため、湖水地方にあるウィリアム・ワーズワース記念館に赴き、資料収集や調査を行った。また、ギャスケル作品における看護行為の扱いについて調べるため、ロンドンの大英図書館で書簡集や論文や批評文献を調べた。

平成 25 年度
　出産による育児休暇取得のため、この年度は研究を中断した。

平成 26 年度
　エリザベス・ギャスケルの文学における医療表象について最新の資料を調べるため、ロンドンの大英図書館で書簡集や論文・批評文献などを調べた。
　また、ナイティンゲール博物館やディケンズ博物館などに赴き、ヴィクトリア朝当時に活躍した看護師であるフローレンズ・ナイティンゲールやメアリー・シーコールについての資料収集を行った。それらの資料を基に、ギャスケルの二つの短編について論文を執筆した。

平成 27 年度
　シュライナーの論文を読んでいた際、フェミニズムとの関連から 20 世紀の女性作家ヴァージニア･ウルフ(Virginia Woolf, 1882-1941)の作品に見られるヴィクトリア朝女性の表象を調査する必要が出てきたため、ロンドンの大英図書館で書簡集・資料収集および論文検索を行った。調査を元に、ウルフの作品『灯台へ』(*To the Lighthouse*, 1927)に見られる女性と看護の表象について論文を執筆した。

平成 28 年度
　チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1802-1870）とオリーヴ・シュライナー（Olive Schreiner, ）の作品に共通してみられる男性による看護行為について検討するため、ロンドンの大英図書館で書簡集、および論文や批評文献等を調査した。その後、ディケンズとシュライナーの作品における男性による看護表象について研究発表を行った。

４．研究成果
　(1) ウィリアム・ワーズワース(William Wordsworth, 1770-1850)の『抒情詩集』(*Lyrical Ballads*, 1798)所収の詩 “An Idiot Boy”の内容に基づいて書かれたエリザベス・ギャスケルの二つの短編「マーサ・プレストン」(“Martha Preston,” 1850）と「一時代前の物語」(“Half a Life-time Ago,”1855)は、基本的なプロット展開は同じであるものの、看護場面と、その後の物語展開は大きく異なる。その変化の理由について分析したものを、日本ギャスケル協会編『没後 150 年記念エリザベス・ギャスケル中・短編小説研究』の一章として、「マーサ・プレストン」と「一時代前の物語」―看護がもたらす「自立と共生」―」という論文を発表した。
　また、これに関連して、日本ギャスケル協会第 27 回大会シンポジウム「ギャスケル中・短編小説の魅力―『没後 150 年記念論文集』を語る」で、「第六章　フェミニズム」と題して口頭発表も行った。

　(2) ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』のラムジー夫人のヴィクトリアン・ナースとして物語内で果たした役割および人物造型を、ヴィクトリア朝文学に登場する理想的女性像として描かれたヒロインラムジー夫人の人物造型を分析したものを、「『灯台へ』に見るヴィクトリアン・ナースとしてのラムジー夫人」というタイトルで『関西学院大学英米文学』第六十巻に投稿、査読後掲載された。

　(3) ディケンズの作品、特に『マーティン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*, 1843-44）と『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61）に登場する男性による看護表象と、シュライナーの『アフリカ農場物語』(*A Story of an African Farm*, 1883）に登場する男性が女装して行う看護の場面を比較・分析した論考を「『アフリカ農場物語』と男性による看護：ディケンズ作品と比較して」というタイトルで、日本英文学会関西支部第 11 回大会で口頭発表を行った。
　この論考については、発表の際に多くの貴重なコメントをいただいたので、修正の後論文化して、近いうちに学会誌等に投稿する予定である。

　今回の研究を始める段階では、ディケンズ、ギャスケル、シュライナーの三人の作品分析とナイティンゲールやシーコールといった実在の看護師との関連が得られることを目的としていたのだが、実在の看護師との関連については、あまり時間を割くことができなかった。
　その代わり、ヴァージニア・ウルフのような 20 世紀初頭の女性作家の作品においても、ヴィクトリア朝の医療表象が描かれていると分かったのは大きな収穫だった。というのも、私が進めていたテーマは、単に 19 世紀イギリ

ス文学の領域に留まらず、20 世紀の作品にも影響があるということが分かったからである。
　さらに、ウルフの分析を進めるうちに、児童文学や 19-20 世紀アメリカ文学においても同様の考察ができる可能性が高まったため、それらの分析は今後の研究課題として考えていきたい。
　また、ディケンズやギャスケル以外の他のヴィクトリア朝文学作家の作品についても、ヴィクトリアン・ナーシングに関する言説と物語展開の関係について考察する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
①西垣佐理、「『灯台へ』に見るヴィクトリアン・ナースとしてのラムジー夫人」　査読有、『関西学院大学英米文学』第六十巻、関西学院大学英米文学会、2016 年 3 月、pp. 19-38。

〔学会発表〕（計 2 件）
①西垣佐理、「『アフリカ農場物語』と男性による看護：ディケンズ作品と比較して」、日本英文学会関西支部第 11 回大会、事前審査有り、於：神戸市外国語大学（兵庫県神戸市）、2016 年 12 月 17 日。

②西垣佐理、「第 6 章フェミニズム」、「ギャスケル中・短編小説の魅力―『没後 150 年記念論文集』を語る」、日本ギャスケル協会第 27 回大会シンポジウム、於：名古屋大学（愛知県名古屋市）、2015 年 10 月 3 日。

〔図書〕（計 1 件）
①西垣佐理、「第 19 章「マーサ・プレストン」と「一時代前の物語」―看護がもたらす「自立と共生」―」、日本ギャスケル協会編『没後 150 年記念　エリザベス・ギャスケル中・短編小説研究』　査読有、大阪教育図書、2015 年 11 月、pp. 219-228。

６．研究組織
(1)研究代表者
西垣　佐理（NISHIGAKI, Sari）
近畿大学・農学部・講師
　研究者番号：00581042